

# 地名の由来と史跡と文化財

(国分寺台地区編)



上総国分寺本堂

ふるれんネット・いちまる館でダウンロードできます

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

令和3年6月編集・製作

## まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちはら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社と思われますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社と思われます。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていいますが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

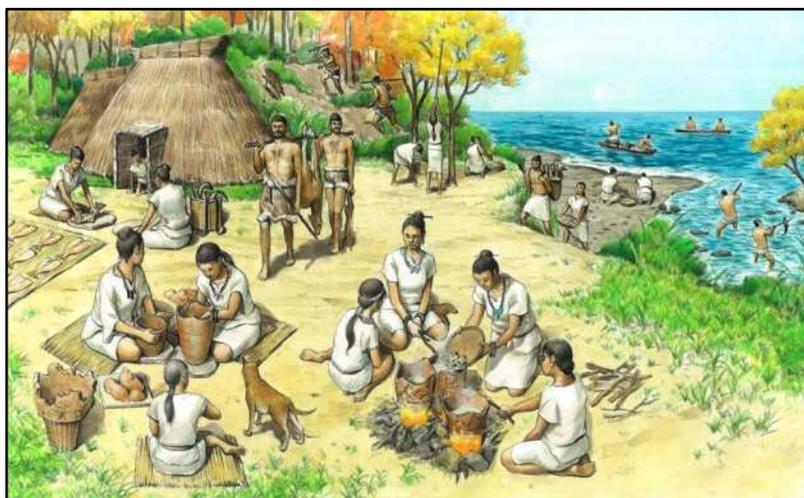
北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われている。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「国分寺台地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



## 市原郡内の国分寺台地区の地名の由来

### 千葉県の名の由来

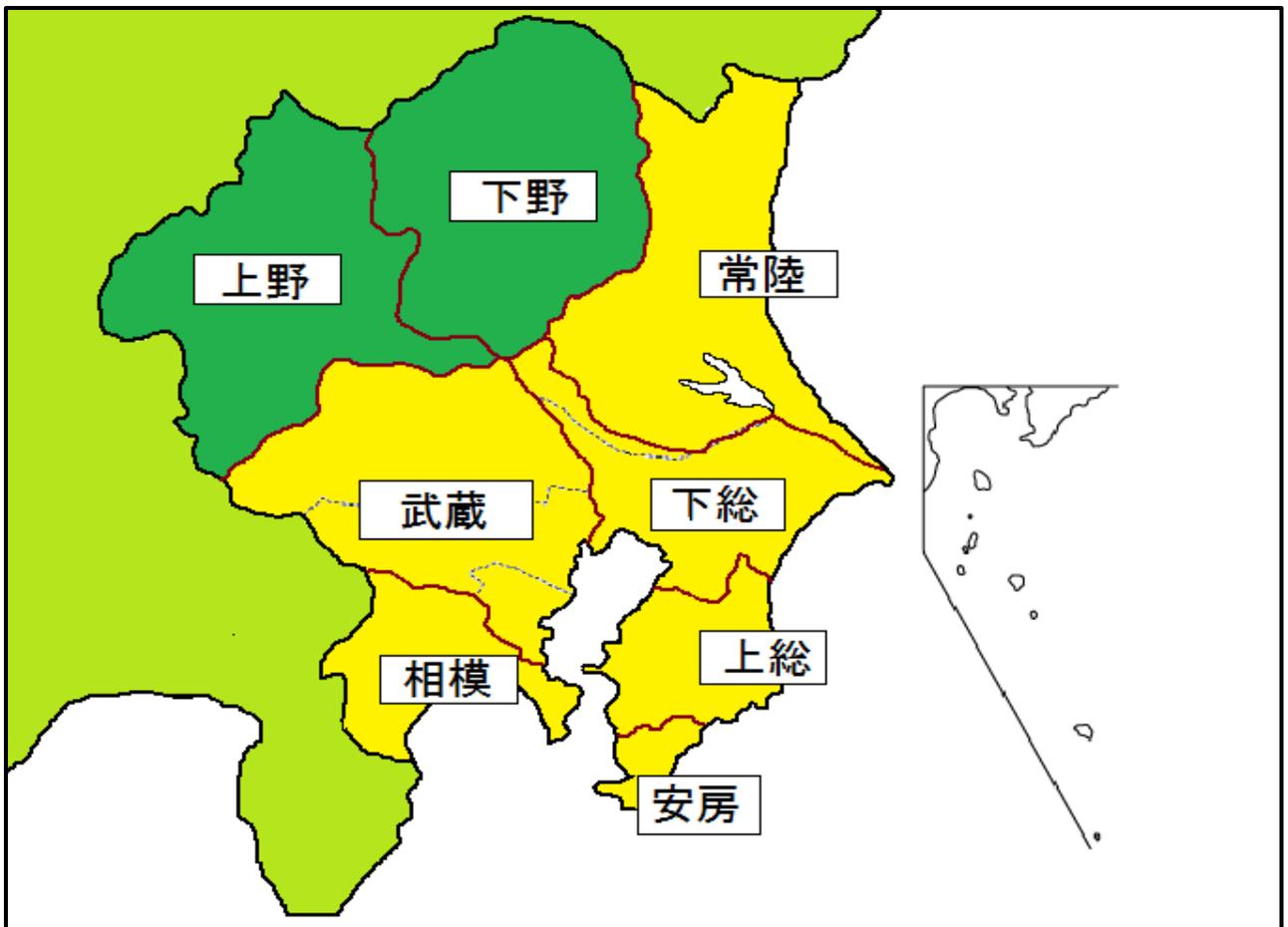
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



# 市原市の地区別地図

020/9/26

行政区-scaled.jpg (1829×2560)



## 市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

### 上総国市原郡の6郷

#### 1・海部郷（あまのこう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

#### 2・市原郷（いちはらこう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

#### 3・湿津郷（うるつこう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な涌泉があることから命名された地名と思われる。

#### 4・江田郷（えだこう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

#### 5・菊麻郷（くくまこう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

#### 6・山田豪（やまだこう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

## 国分寺台地区（加茂・郡本・西広・惣社・根田・藤井・山田橋・国分寺台・中央・東・西・北・南）概説

国分寺台地区は、京葉工業地帯の工場操業に伴い、日本全国から移り住んできた従業員の増加により、住宅地の造成が必要となり、市内に辰巳台や有秋台などの団地造成が行われた。昭和38年に市原郡から市原市のなり行政の中心としての市役所移転が必要となり、その候補地として上総国分寺のあった現在地を区画整理し、市役所庁舎等の建物と、住宅地を造成した。

昭和46年に区画整理事業が開始され、当時は原野が多く大規模な区画整備事業には適しており、そこに役所庁舎を始め小・中学校や公民館・消防署・公園などの設備を設置した。区画整理事業は平成13年に終了した。

国分寺台地区内には、国分寺台中央・東国分寺台・西国分寺台・南国分寺台・北国分寺台・加茂・西広・根田・諏訪・惣社・郡本・藤井・山田橋の一部含まれている。

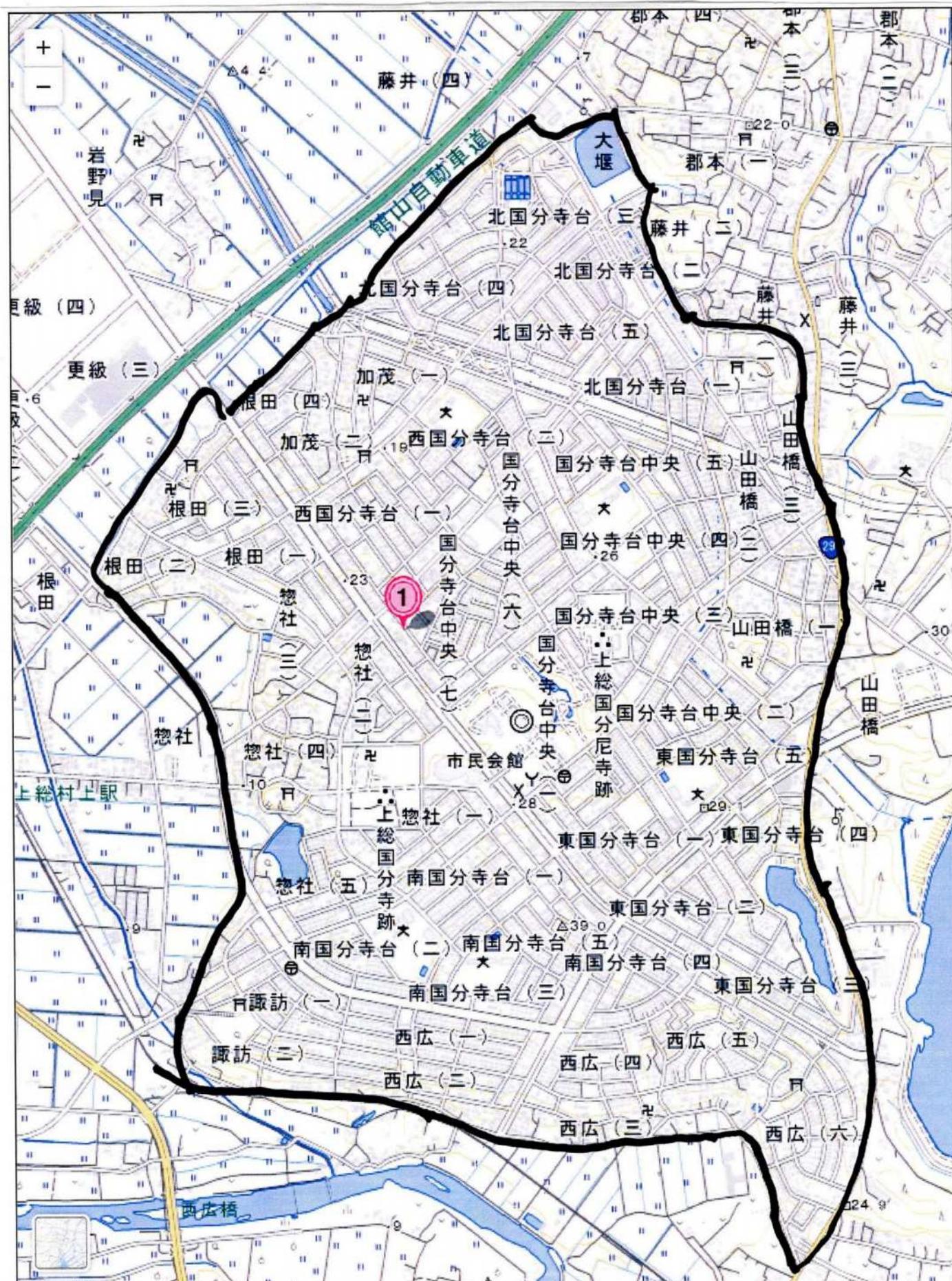
地域内の史跡文化財には、国指定文化財の上総国分寺・上総国分尼寺を始め稲荷台古墳・神門5号墳・将門塔・国分寺薬師堂附厨子などがあり、神社では、加茂神社・上下諏訪神社・戸隠神社・根田神社・前廣神社などが寺院では、上総国分寺・上総国分尼寺・西廣院・長栄寺・根立寺などがある。

ここでは、旧地籍の由来と史跡文化財などについて紹介します。

### 市原市役所庁舎（第2庁舎）



# 市原市国分寺台地図



加茂（かも）・西国分寺台 神社・寺院・史跡文化財・城址 加茂神社・長栄寺（日蓮宗）

江戸期は加茂村。地名の由来は、加茂神社の所在にちなむ。「かも（河岸浸食）」は、河川氾濫の際に流河道となる土地やその恐れのある地を指す地名。

### 加茂神社（かもじんじゃ）

所在地 市原市字向山2丁目5-2

創建時期 承安2年（1172年）

祭神 別雷電神

宮司 小田 千里

由緒・伝説 旧村社。男千木。山城国愛宕郡にあったのを分霊し遷祀したという。承安2年に高滝の高瀧神社に分祀すると伝えられているが、古書の記述では高瀧神社にまつわるものしかないことから、高瀧神社から加茂へ分祀されたものと思われる。

昭和57年に土地区画整理により遷宮。境内に道祖神社・八幡神社・子安神社がある。

加茂神社の拝殿の建物



境内入口の鳥居と石段の参道



本殿（右側）と拝殿（左側）



拝殿正面入口



境内の各神々を祀る社



昭和57年に奉納の手水舎

本殿遷座の記念碑



### 大乘山長栄寺（だいじょうさん ちょうえいじ） 日蓮宗

所在地 市原市加茂1丁目3-10

創建時期 慶長19年（1614年）

本尊 不詳

住職 近藤 良雄

由緒・伝説 長栄寺は、加茂地区の菩提寺として慶長19年に松戸市平賀の本土寺（あじさい寺）

長栄寺の本堂建物



の末寺として建立された。昭和51年に、国分寺台区画整理事業に伴い長栄寺内の墓地を市営能満墓苑に移転し、昭和59年に長栄寺28世慈良印日海上人の永年の宿願であった本堂再建工事着工し一か年に及ぶ工事のもと、本堂が造営された。



長栄寺の正面入口と上部の扁額



本堂の内部。祭壇が祀られている



境内入口右側に建つ寺標と地藏仏

### 郡本 (こおりもと)

鎌倉期は郡本郷、江戸期は郡本村。天正19年(1591年)の書状に「氷本郷」と見え、その当時は根田村・藤井村・門前村が当村に含まれていたという。地名の由来は、古代市原郡の郡衙所在地であったことに由来する。条里制の遺跡と推定される字一ノ町(いちのまち)・二泉町(にのいずみちょう)・三ノ町(さんのまち)、中世の給田の異称と推定される加茂給(かもきゅう)・於局給(つぼねきゅう)などの地名が残る。また字古甲(ふるこう)は、古国府の名残とも思われ、上総国国府所在地であった可能性もある。なお、郡本地籍では北国分寺台地区の一部が含まれるが、史跡や文化財等については特筆すべきものがないので省きます。

### 西広(さいひろ)・東国分寺台 神社・寺院・史跡文化財・城址 前廣神社・西廣院(真言宗豊山派)

戦国期に西広の地名があった。江戸期は西広村。本郷地区の18軒が草分けと伝えられる。村内の前廣神社は貞観10年(868年)に正6位上を授けられた古社で、文久2年ごろ(1862年)には三島大明神と称している。地名の由来は、「前広」が変化したものと思われ「さき(山の前)・ひろ(広)」で、丘陵の前の広い土地があることを指したものの。

### 前廣神社 (さきひろじんじゃ)

所在地 市原市西広字上ノ原6丁目14  
 創建時期 弘仁年間(810年~823年)  
 祭神 大山祇命  
 宮司 時田 克男  
 由緒・伝説 旧村社。国史現代社。弘仁年間の創建という。貞観10年に正6位上を授けられている。明治20年(1887年)に日宮神社・大宮神社・日枝神社・香取神社・天神社・子聖神社・湯殿神社白幡神社を合祀した。社殿の背後に古墳がある。



前廣神社の拝殿の建物



前廣神社の境内入口の鳥居



本殿（左側）と拝殿（右側）



明治20年に合祀された神社祠群

天神山西廣院（てんじんさん さいこういん） 真言宗豊山派

所在地 市原市西広3丁目6-7

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 田中 俊弘

由緒・伝説 西廣院の創建年代は不詳ですが、境内の石碑によると、天明2年（1782年）に再建された。その後昭和46年頃に本堂の傷みがひどくなり改築することとなり、壇家の協力を得て昭和47年に本堂及び庫裡を新築した。なお、当寺は、能満釈蔵院の末寺であり市原郡四国八十八か所霊場の8番札所となっている

西廣院の本堂の建物



西廣院の境内入口の寺標



本堂左に十一面観音の石像



本堂の中の祭られる祭壇

惣社（そうじゃ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 戸隠神社・国分寺・国分尼寺・神門5号古墳 将門塔・国分寺薬師堂附厨子・

江戸期は惣社村。平安期に諸国の国衙近傍に国内神祇を合祀した惣社が設けられたが、当地の地名も上総国惣社が存在したことにちなむ。現在戸隠神社が惣社を名乗るが、もとの集落は同神社下の字十二所付近であり、ある時代に台地上に移ったと伝えられ、惣社も本来その付近にあった可能性があるという。上総国分寺跡もあり広大な寺域が確認されている。また上総国府があった地の一つと推定されている。国司は182代まで来任しており、その中には大友家持や「更級日記」の作者で上総国司菅原孝標の娘もよく知られている。

戸隠神社 (とがくしじんじゃ)

所在地 市原市惣社字本郷4丁目9-18  
創建時期 天平12年(740年)に創建  
祭神 天思兼命・天手力雄命・天表春命  
神門 左三つ巴  
宮司 時田 克男  
由緒・伝説 旧村社。天平12年に創建された。

戸隠神社の拝殿建物



信州戸隠大神の垂跡と言われる。国分寺所蔵の由来によると、天平年中(729年~749年)五井の浦で夜になると風が吹きクジラが吠えるような鐘の音が響くという怪異が起きるようになり、人々は恐れて暗くなる外出しなかった。里の住人・原野藤内は突然目が見えなくなり国分寺に通って神仏に祈っていた。七日目の夜に夢で「怪音の原因を訪ねてみよ、両目はすぐに癒えるだろう」とのお告げがあったので、怪異のある橋の側に立っていると例の音が鳴り始め異香がして光が輝いた。すると俄かに両目が見えるようになった。音の正体を見極めようと思った時忽然と老翁が現れ「吾は戸隠神なり。国分寺の守護の為に現れた。吾を境へ祀るべし、奥の方の光は竜宮城より捧げる宝器なり」と言い終わると闇にご神体となった。藤内は驚きながらも光の方を確認すると波打ち際に赤銅の撞鐘があったので、国分寺の境に戸隠大明神と鐘を祀った。このほか信州の村井長康の家臣で本田八作重房が上総に文武修行に船で向かった際、海難に遭い当神社に救われた事から、延暦13年(794年)に当社の神官となり姓を宮崎に変えたという伝承もある。神事は、創建の由来により8月に五井浦大音橋まで神輿渡御がある。境内には八坂神社(建速須佐之男命・木花開耶姫命・大物主命)・金刀平神社(大物主命)・疱瘡神社(岐神)がある。



境内入口の大鳥居と石段の参道



戸隠神社の祭神の祭る本殿社



拝殿の入口と掲げられる扁額



淡島神社の鳥居と奥に神社の祠



稻荷神社の鳥居と神社の祠



八坂神社・疱瘡神社・熊野神社  
金刀平神社などを祀る祠群

医王山清浄院国分寺 (いおうさん せいじょういん こくぶんじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市惣社1丁目7-23

創建時期 天平13年(741年)

本尊 不詳

住職 大谷 則夫

由緒・伝説 天平9年に行基の開山場として創建された。寛永10年(1634年)に惣社字蔵の上にあった清浄院を合併した。天慶3年(941年)の将門追討の際に兵火にかかり伽藍は焼け落ちたという。現在旧国分寺の塔跡などが残っている。境内に将門塔や薬師堂附厨子などの市指定文化財などもある



国分寺の本堂の建物



国分寺境内の入口に建つ寺標



境内に建つ山門の建物



山門の左右には金剛力士の木造



境内の鐘楼と釣り鐘



本堂入口に掲げられる扁額



山門脇に並ぶ六地藏と石仏

上総国分寺跡 (かずさこくぶんじあと)

所在地 市原市惣社1丁目7-1

創建時期 天平13年(741年)

種類 史跡

説明 上総国分寺は天平13年に聖武天皇の詔により全国に60余国に建立された国立寺院で、正しくは金光明四天王護国之寺と言う僧寺で、各地方における仏教や文化の中心となっていた。上総国分寺の寺域はおよそ13.9万㎡に及び、全国でも最大級の規模を誇ります。飛鳥の大官大寺式伽藍配置を持ち、発掘調査では、金堂・講堂・塔・中門・南大門・西門・回廊が検出されている。付近には瓦窯跡や寺を運営するための付属施設などが多数確認されているほか、七重塔の基壇と大きな礎石が見られます。現在は、医王山清浄院国分寺が法燈を伝えている。

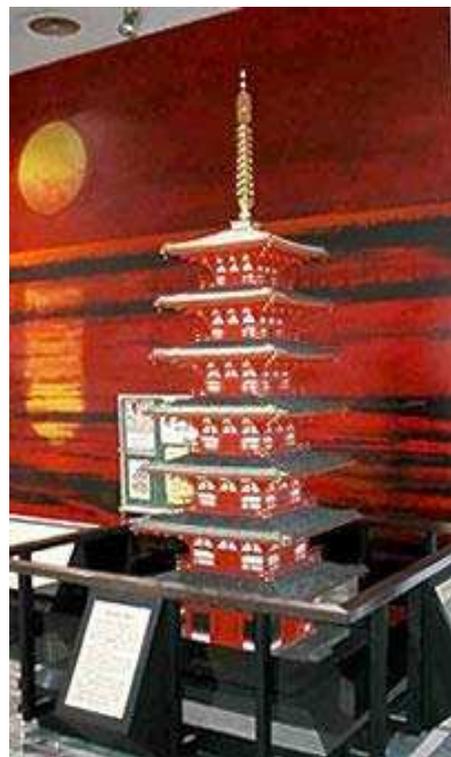
国指定重要文化財



国分寺西門の礎石跡



七重の塔の心礎石跡



国分寺七重塔の復元レプリカ



国分寺薬師堂の建物



薬師堂の正面入口

### 国分寺薬師堂附厨子（やくしどうふずし）

市原市指定文化財

所在地 市原市惣社1丁目7-22

所有者 医王山清浄院国分寺

種類 建造物

説明 桁行3間・梁間3間の三間堂と呼ばれる形式の建物で、正面に1間の向拝庇が設けられている。墨書銘から享保元年（1716年）の建立と分かり、厨子も同時期に造られたものとみられる。屋根は茅葺きの入母屋造で、内陣格天井には植物紋様、外陣天井には竜及び飛天が描かれているほか、内陣の須弥壇に置かれた厨子には金・朱・緑の彩色を施すなど、格調高い唐様に造られている。



薬師堂内の須弥壇に置かれる厨子



堂内に描かれている飛天の絵



天井に描かれている竜や飛天

### 将門塔（まさかどとう）

市原市指定文化財

所在地 市原市惣社1丁目7-22

所有者 市原市

種類 建造物

**説明** もと菊間新皇塚古墳（現在は消滅）墳丘上にあった宝篋印塔で、平将門の墓との伝承がある。現在は国分寺仁王門前に移築されている。高さ2.35mで安山岩製。隅飾りはほぼ直立し、内側は二重弧線、複弁の反花座は彫りが深く、相輪舞と燈身は復元したもの。基礎部に「応安第五（1372年）壬子」「十二月三日」の銘がある。年号からすると、将門との直接的な結びつきは考えにくいですが、伝承に従い塔の名称とされている。



将門塔と史跡の説明看板

**上総国分尼寺（かずさこくぶんにじ）**

国指定文化財

**所在地** 市原市国分寺台中央3丁目5-2

**創建時期** 天平13年（741年）

**所有者** 市原市・他

**種類** 建造物

**説明** 上総国分尼寺は、正しくは法華滅罪之寺という尼寺で、聖武天皇の詔により天平3年に建立された。当寺跡の発掘調査は数度行われ、伽藍配置ばかりではなく、尼寺を構成する幾つもの施設の存在が判明した寺の施設には、尼僧の日常生活にかかる大衆院、事務を就る政務院、建物の修理をする大工や金工の工房である修理院、薬草や野菜・花などを栽培する園院、花苑院、寺の雑役などに従事した人たちの居住する賤院などがある。



寺域は南北が372m、東西は北辺で285m、面積は約12万3千㎡に及び、規模の分かっている全国の国分尼寺の中では最大規模を誇る。伽藍地は寺域の南西寄り、南北200m、東西170mの規模を有する。現在まで判明している主要な建物跡が、金堂跡、講堂跡、鐘楼跡、経楼跡、回廊跡、門跡のほか、八脚門であった中門と東西の門跡、北門、金属の加工を行った工房跡がある。現在、中門と回廊の一部が復元されており、隣接して史跡上総国分尼寺跡展示館が設けられている。



復元された中門と回廊の一部

神門古墳群第5号墳 (ごうどこふんぐん だい5ごうこふん)

県指定文化財

所在地 市原市惣社5丁目5-1

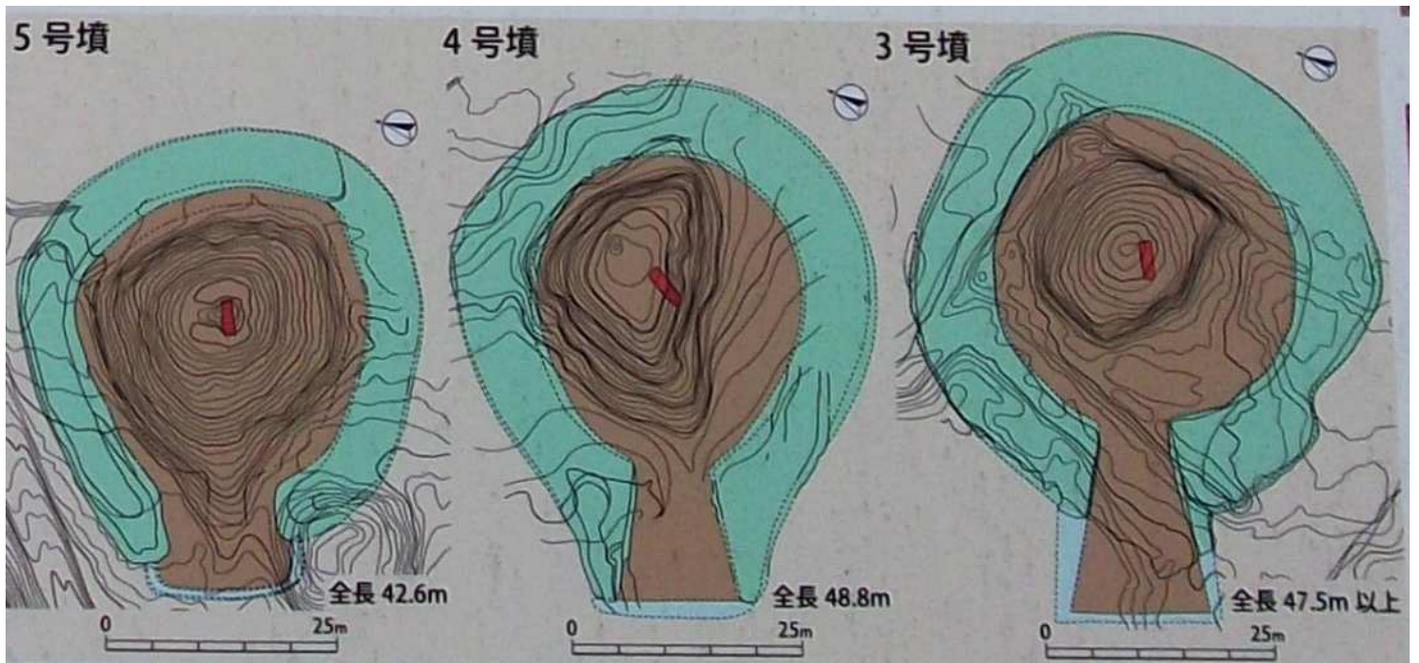
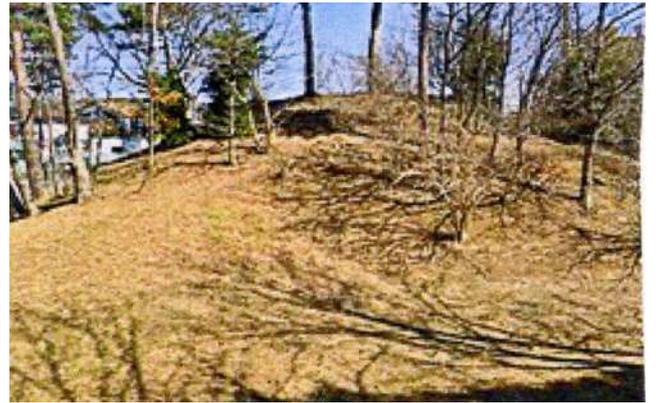
所有者 市原市

築造時期 古墳時代初期

種類 史跡

説明 神門古墳群は、市原市の養老川下流域の北岸、市原台地西縁部に立地する古墳群です。所在する古墳群のうち、5号墳は墳丘が現状保存されているもので、東日本最古のものと言われています。

墳墓は直径33m、高さ5mを測る円形の墳丘と、西側に張り出した長さ約5.5m、幅5mの突起部分を持ったいちじく形をした墳形で、幅6mの周溝を廻らせています。その墳形は前方部が未発達で、典型的な前方後円墳となる以前の過渡的な様相を示しています。また、その出土品から3世紀後半、つまり古墳時代の最も初期のものと同判明し、県内はもとより、東日本でも最古の古墳と考えられる。



神門古墳群の3号墳・4号墳・5号墳の説明図



神門5号墳の説明看板



5号墳の全景の写真



5号墳の発掘調査の航空写真

根田（ねだ）・国分寺台中央 神社・寺院・史跡文化財・城址 根田神社・根立寺（日蓮宗）・根田城跡  
 祇園原貝塚（市指定文化財）

江戸期は根田村。郡本村の枝郷。地名の由来は、「ね（高くなった所）・た（処）」で、丘陵を指したもの。「上総国町村誌」では、平将門が当地に祇園大社を建てたという伝承を載せ「今字祇園原に小祠在り牛頭天王と称す」と記し、その神田があったという。また上総国分尼寺跡があり、尼坊跡・西門・北門跡・大衆院跡・賤院跡・修理院跡などが確認されている。

根田神社（ねだじんじゃ）

所在地 市原市根田字根田3丁目8  
 創建時期 慶雲4年（707年）に創建  
 祭神 天兒屋根命 神紋 下り藤  
 宮司 和田 武章  
 由緒・伝説 旧村社。男千木。慶雲4年の創建。

根田神社の拝殿の建物



藤原秀郷が平将門との戦いに出陣する際、祖先鎌足の神祖・天兒屋根命に将門を討つ際には祭祀すると誓いをたて、見事将門を討つたので祀ったという。宝永2年（1705年）に社号を「苗鹿神社（みょうがじんじゃ）」と改称し社殿を再建し、現在の場所に遷座した。現在は根田神社と称している。明治44年（1911年）に天神社（字北ノ町：天穗日命）・月読命（字南祇園原：月読命）・神明神社（字祇園原神明：大日靈命）・八坂神社（字祇園原天王：素盞鳴命）を合祀。境内に子安神社がある。



境内に建つ鳥居。手前に手水舎



本殿（右側）幣殿（左側）社殿



拝殿の正面入口と扁額



境内には神楽殿の建物がある



子安神社の社殿と鳥居



天保8年に奉納された石燈籠

苗鹿山根立寺 (みょうがさん こんりゅうじ) 日蓮宗

所在地 市原市根田3丁目8-7

創建時期 万治元年(1658年)に創立。

本尊 不詳

住職 山本 隆真

由緒・伝説 根立寺は、苗鹿山と称し、万治元年に創建され、日雲上人が延享年間(1744年~1748年)に中興されたという。「日蓮宗寺院大鑑」の縁起によると

法華宗にして、下総平賀本土寺の末寺で、開山は不詳にして中興開山は五世に日雲上人にして此時代に建碑して俗稱殿様石の碑文に残されている。

「當山永聖之由来者」「井上遠江守正敦御弟井上外記殿法號玄明院殿存日之願望也依是正敦追福旁成宗就於永聖者也延享三丙寅二月十三日」

「地域根田区の中央高地にありて眺望絶佳、東根田神社に接す、本堂は間口五間半奥行四間、近年改築す、本堂の外庫裏あり」「市原郡誌より」

根立寺の本堂建物



根立寺の入口にある石寺標



根立寺の本堂の入口



境内の石碑と日蓮菩薩の石碑

根田城址 (ねだじょう)

所在地 市原市根田2丁目

築城時期 不詳

築城主 不詳

説明 根田城は、根田2丁目の根田交差点や「根田」というバス停のある辺りの北東側にあったという。しかし現在は宅地造成の為消滅している。1960年の航空写真で見ると、城址辺りに右のラフ図のような地形が見えている。

長軸100m程の楕円形に近い区画で、周囲には堀のようなものが見られ、郭内には何軒もの民家が存在しており、環濠集落のようなものであったと思われる。



祇園原貝塚 (ぎおんばらかいずか)

市原市指定文化財

所在地 市原市根田地先

所有者 市原市

居住時代 縄文時代後期から晩年期と思われる

説明 祇園原貝塚は縄文時代後期から晩年期にかけての遺跡です。現在の市原市役所の東側に位

置し、上総国分尼寺の下層にあたります。

発掘調査では、竪穴住居跡51棟などの遺構と遺物包含層が検出され、それらから大量の縄文土器、土製品、石器などが出土をしている。出土された貝層は竪穴住居跡などの窪みに形成されたものを除けば密度は低く、全体的に薄い堆積です。これは、おそらく奈良時代に上総国分尼寺を建立する際に、大規模な整地が行われた為と思われる。

整理作業の結果、縄文時代後期から晩年期にかけての集落の変遷や埋葬形態の多様性を把握できるなどの成果が上がり、また、貝層サンプルの分析から当時の食生活の一部を明らかにすることができた。なお、祇園原貝塚の近くには、柄鏡形住居を検出した「北野原遺跡」や、ほぼ同時期に形成された西広貝塚もある。



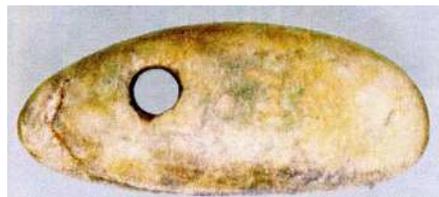
貝塚の説明看板



祇園原貝塚の航空写真



貝塚から出土のみみずく土偶



貝塚から出土のヒスイ製大珠

藤井 (ふじい)・国分寺台東 神社・寺院・史跡文化財・城址

江戸期は藤井村。万治2年(1659年)郡本村から分村して成立。字古甲(ふるこう)や在長面(ぜいちょうめん)は古国府・在庁免の名残りと考えられる。

地名の由来は「ふち(縁)・い(川)」の転訛で、川沿いの地という意味。

また、地域内ではないが江戸期まで「守公山楊柳寺神主院」という寺院があり、寺名の通り「飯岡八幡宮」の柳楯神事と大いに繋がりのある寺院であったが、明治政府の「廃仏毀釈」により廃寺となったという。詳しくは、「市原地区編」をご覧ください。

山田橋 (やまだばし) 神社・寺院・史跡文化財・城址 稲荷神社・中和院(真言宗山階派)・  
養福寺(曹洞宗)・稲荷台遺跡

江戸期は山田橋村。山田郷とも言われた。奈良・平安期の官営跡あるいは、祭祀遺跡と推定される稲荷台遺跡などがあるが、その多くは国分寺台土地区画整理事業により消滅している。

地名の由来は、「やまだ(山処)・はし(端)」で、山田郷の端という意味。

稲荷神社、中和院、養福寺の紹介については、地域内ではないので詳しくは「市原地区編」をご覧ください。

稲荷台遺跡群(1号~13号墳) (いなりだい いせきぐん)

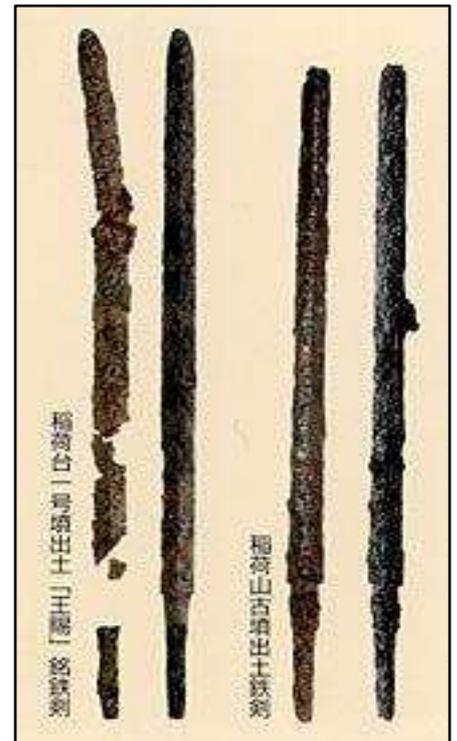
稲荷台1号墳の「王賜銘鉄剣」が発見されたのは、昭和62年11月初めの頃でした。稲荷台古墳群には1号墳から13号まであり、昭和50年から発掘調査を始めて十年後の事でした。50年度・54年度・56年度の調査では周辺の集落部分を調査し、合計12基の古墳を検出された。その後平成11年度に1号墳から北に80m程の処から13基目の円墳が発見された。古墳群はその立地から、北側の山田橋字稲荷台と字北の海道地区の1号墳を含む11基のA群と、南側の山田橋字宮ノ前地区に離れて位置する2基のB群に分かれる。

埋葬施設は、A群の墳丘が残されていた古墳の1・3・4号墳で木棺直葬の主体部が、B群では11号墳で凝灰岩質砂岩裁石切組積両袖単室横穴式石室が、12号墳では木棺直葬の変則的古墳が検出され、他の古墳では二次的な周溝内土擴が調査された。

稲荷台1号墳は、周囲を畑作で削られ、墳頂部には神明神社の祠が祀られていた。このような祠は3号墳には八幡神社が、4号墳には八坂神社の祠が祀られており、これらの墳丘が残されていた要因と思われる。古墳群の築造時期は、出土土器や副葬品などからA群は5世紀から6世紀前半の古墳時代中期から後期の築造で、B群は7世紀の古墳時代末期の築造と思われる。1号墳は、稲荷台古墳群の中では最大規模を有し、周溝底面内径間の墳丘径は27m、盛土高さ2.2m、周溝城面積幅5.2m、周溝下側面積2.1m、周溝外側上面径33m、周溝の深さ2m、周溝底面と墳頂部の最大比高差4.1mを計測し、墳丘は2段構築となっている。埋葬施設は、頂部から中央施設と北施設の二基が検出されている。

「王賜銘鉄剣」を出土した中央施設は、東側から墳頂部に登る参道と明神社祠の真下に位置し、業者によって攪乱・削平され、部分的に依存したため、正確な形状や規模を把握出来ない。中央施設からは、金属類装飾品や鉄剣などが検出されている。

北施設では、鉄刀1点、鉄鍬10点以上、胡ろく金具1点、捧げ棒1点、砥石などが検出されているほか、周溝から須恵器5点、土器類などが出土している。





本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
  - ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
  - ・全国遺跡報告総覧
  - ・日本の城郭・城址（千葉県版）
  - ・寺社にまつわる伝説（市原市 その2）
  - ・市原市・宗教法人一覧
  - ・市原の城郭と国府跡をたずねて
  - ・Wikipedia- 市原郡
  - ・市原市歴史と文化財シリーズ
  - ・いちばら歴史の旅人
- ・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

## 国分寺台地区の地名の由来と史跡文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満1020番地1

連絡先 090-3545-1113

本資料をコピーする場合は、**ふるれんネットのいちまる館**をご利用下さい。